Kobe University Repository : Kernel

PDF issue: 2024-04-28

# ドイツ絶対主義時代における湖沼利用 : ブランデンブルク・バイロイト辺境伯の“理想郷”

川西, 孝男

(Citation)
歴史地理学,49(5):98-98

(Issue Date)
2007-12

(Resource Type)
journal article

(Version)
Version of Record

(URL)
https://hdl.handle.net/20.500.14094/90000584

## 205. ドイツ絶対主義時代にみられる湖沼利用 －ブランデンブルク・バイロイト辺境伯の“理想郷”－

川西　孝男（神戸大・院）

ヨーロッパの絶対主義に関する研究は戦後に転換点を迎え，その君主権の制約性や，実際に支配が及んだ地域あるいは領邦の研究にも重点が置かれるようになった。ドイツの絶対主義は領邦絶対主義として知られるが，とりわけバイロイト領邦は“閉鎖領邦”と位置づけられるように，領邦内で絶対主義が貫徹される可能性が高く，加えて辺境伯領として強力な軍事力の保持を許され，ドイツ絶対主義時代にバイロイトは大きな変容を遂げた。この領邦文化を牽引したのが，ブランデンブルク・バイロイト辺境伯ゲオルク・ウィルヘルムと領邦内の湖沼ブランデンブルクである。

16世紀初頭にマイン川の支流を引いて作られた大きさ約1.5km$^2$のこの湖沼は当時，“ブラン・ベルガー沼池”と呼ばれ，市民に飲料水や養殖鯉といった貴重な水資源を供給した。ところが三十年戦争で破壊されて干上り，その歴史を閉じたかに見えた。しかし，時の辺境伯クリスティアン・エルンストが沼池を再建し，名を“ブランデンブルク沼池“と改め，辺境伯直轄としたことで，沼池は絶対主義時代のバイロイト宮廷とつながりを持ち，幼き辺境伯皇太子ゲオルク・ウィルヘルムもこの沼池で遊び，見果てぬ海洋への夢を募らせた。

この皇太子は少年時代，外交見聞を兼ねた英国への渡航で生涯を決定づける体験をし，帰郷直後の1695年，沼池を“ブランデンブルク湖”と改め，岸辺を修復し，軍艦4隻を建造した上，兵士2千人を招集し，岸辺に塹壕や司令塔を作らせて軍事演習を開始した。これが“バイロイト海戦”と言われ，後に彼はこれを湖上オペラの域に高め，湖には直径100メートルの真円のバラ庭園をもつ波止場が設けられ，全長30m，12の砲門を持つ母艦「聖ゲオルク」などが停泊した。このように18世紀初頭のバイロイトでは領邦絶対君主たる辺境伯による壮大かつ華麗な湖上祝祭が行なわれていたのである。

またゲオルク・ウィルヘルムは，自らを竜退治伝説の守護聖人聖ゲオルクに讃えて，湖を中心とした都市ザンクト・ゲオルゲンを設立し，自らの“理想郷”を完成させた。この湖沼の恩恵は大きく，彼の治世に水資源を用いた高級陶磁器，ビール，レンガ工場などといった大型地場産業も発展するなど，これ以降，バイロイト辺境伯の宮廷都市文化はブランデンブルク湖とともにヨーロッパ屈指の繁栄を遂げることになる。